

本文

	頁
豊後日田出土の漢金銀錯嵌珠龍紋鐵鏡……………梅原末治……………	五
明兆筆 五百羅漢圖……………	一五
山王宮曼荼羅……………	一六
西行法師像……………	三三
池大雅筆 考槃噴林圖……………	二六
李唐派 山水圖……………	二六
釋迦如來佛頭……………	三三
研究餘録……………	三九

圖版

	頁
豊後日田出土漢金銀錯嵌珠龍紋鐵鏡……………京都市 梅原末治氏藏……………	三
鐵鏡金銀錯嵌 徑二・三種	
明兆筆 五百羅漢圖……………東京都 根津美術館藏……………	一一
同……………	… 一三
絹本着色 掛幅 縦一七三・六種 横八九・四種	
山王宮曼荼羅……………和泉市 細見良氏藏……………	一七
絹本着色 掛幅 縦一六八・〇種 横七八・五種	
西行法師像……………東京都 江田勇二氏藏……………	三三
絹本着色 掛幅 縦七八・九種 横三九・五種	
池大雅筆 考槃噴林圖……………西宮市 瀬川徳助氏藏……………	二七
絹本着色 掛幅 縦八七・一種 横三三・三種	
李唐派 山水圖……………新潟市 加賀田勲二郎氏藏……………	二九
同……………(部分)……………	… 三三
絹本水墨 掛幅 縦九四・五種 横四四・七種	
釋迦如來佛頭……………奈良市 興福寺藏……………	三五
木造 頭高一〇四・二種	

豊後日田出土の漢金銀錯嵌珠龍紋鐵鏡

梅原末治

日本各地の上代遺跡から出土する中國の古鏡は夥しい數であつて、うちに古く漢代中期の西紀元前後に遡る時代の遺品に優れたものがある。精良な白銅で鑄られた漢の宮室での尙方官造の尙方作方格規矩四神鏡、新莽王氏作の同じ四神鏡の大形品が北九州なり、畿内の高塚から見出されている如きはその一例である。これは優れた中國の古文物のこの國への傳來が既にその頃に於いて目立つていたことを物語るものに他ならない。ところで其等よりも時代の下らない鐵の鏡で、而も鏡背を嵌玉の金銀錯龍紋で飾つた遺品が、豊後の日田市で出土していることの新たに知られたのは、同種の鏡が中國本土でもなお類例の少ない漢代の所謂寶飾背鏡の白眉と見られるのと併せて注目せられることである。但しこの知見は、近年特に盛んな所謂遺跡の新發掘に依る出土品ではなくて、古く見出され、鏽に被われて一向に見榮のしなくなつていたものが、たゞく奈良の古美術市場に賣されたのを、丹念に鏽を除いた結果、それと認められるに至つたもの。而も鏡に興味を持つていた筆者が既に破損しているこの寶物を收得し、白木原好美君の協力に依つて、自からそれを確めると言ふ喜びを持つたものである。

去年の七月三日奈良の養澤荘で開かれた縣文化財保存審議會に出席の途中、たゞく玉林善太郎氏の店に立寄つた際、氏は北九州で手に入れて、奈良博物館にも持參して見てもらうたと言ひながら、鏽で背面の彫れ上つた破損の著しい鐵鏡を示して、同時に一部分に金銀

錯の形迹のあるを指摘したのであつた。ちよつと當時その年の初に天理大學參考館で調査した樺本東大寺山古墳出土の鐵頭裝の鐵の太刀身にある金錯の銘文の研ぎ出しに執心していた折りであり、且つは中國の鐵鏡背紋に時に象嵌のものを見受ける所見よりして、日本の出土と云うこの鐵鏡に興味を覺えたので、直ちに請ひ受けることにした。爾後員餘に亘る白木原君の協力で、背面の金銀錯紋が豫想を遙かに超えたすばらしいものであり、而も本來のほぼ半ばの遺存するのを確めることが出来たのであつた。

二

此の新たに存在の知られた鐵鏡は徑二・三センチを測る中國鏡としては中等位よりもやや大きいもので、鏡體本來の厚さは二・五ミリの薄い扁平な造りである。鏡面の反りは殆んど目立たず、平な鏡背では中央にある徑三センチを超える鈕のみが目立ち、その點で鐵鏡としての通性を示したものである。昭和八年國鐵九大線敷設工事に當つて、採土の行なわれた場所にあつた一古墳から見出された當時は、鏽に被われながらも全かつたこの鏡も、その後保存上の注意を缺き、殊に落しなどした爲に破損の大きくなつてしまつたものを、先ず直接研ぎ出しに依つて認め得た背紋は、第一圖の如きものであつた。併し本來鐵鏡かと思われる鐵地に施されたこの金銀錯は、餘程入念になされているので、既に剝離した細片などをそれに接合することに依つて遂によく背紋の半ばを復原し、本來の構圖を確めることが出来た。さて金銀錯の手法で飾つた右の鏡背の構圖は、鈕を繞つて整美な四葉座があり、つゞく廣